石川県立美術館だより

平成13年7月1日発行　第213号

尾小屋鉱山　坂寛二

話　坂坦道

（特集「坂寛二・坂坦道　油絵と彫刻」３ページ参照）

目　次

橋本雅邦筆「四季山水図襖」……2
古九谷・再興九谷名品展……2
坂寛二・坂坦道　油絵と彫刻……3
常設展示室 主な展示作品……4
美術館小史・余話（12）……5
展覧会回顧（吉田三郎展）……5
企画展示室、貸出中の所蔵品……6
企画展TOPIC、各地の展覧会……7
六月の行事案内、次回の展覧会……7
所蔵品紹介、ﾐｭｰｼﾞｱﾑｼｮｯﾌﾟ通信……8

ホームページアドレス　http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

常設展示室（前田育徳会展示室）
特　集
橋本雅邦筆
「四季山水図襖」
6月28日（木）～7月24日（火）

明治三十八年（一九〇五）に竣工した前田家本郷邸の日本館を飾ったのが、橋本雅邦によるこの襖絵です。小座敷の西側に位置した上の間・次の間二室は、春・夏・秋・冬の「山水」図でめぐらされました。

橋本雅邦（一八三五～一九〇八）は幕末に生まれ、木挽町狩野派の門下に学び、維新後は東京美術学校・日本美術院にて活躍した、「絵師」であり、「日本画家」でした。維新前後の政情不安による絵画需要の減少や、西洋画の登場という混乱期を生きながらも、自らが好む雪舟・雪村に習い、形象のみに捕われない『心持ち』の表現を求め続けました。本襖絵は、雅邦が特に「山水」画を重視する晩年の作です。

前田家にとって、本郷邸の新築は長年の悲願でした。本郷邸は、藩政期より加賀藩の江戸屋敷として使用されていましたが、維新後は一時文部省の用地となり、前田家はその本邸を根岸に移していました。一方、明治二十年頃より、華族となった旧大名家の邸宅新築が始まります。当時、西洋館を建てて「行幸」を仰ぐことが、その家格を示す一大事業だったのです。前田家においてもそれは急務となり、三十五年、利嗣（十五代）の遺志を継いだ利為（十六代）により、本郷新邸として日本館・西洋館の建築が決まります。

日本館に続き、四十年には西洋館も完成し、四十三年、明治天皇の行幸が決定しました。日本館・西洋館の装飾（油彩画はこの時購入）が始まり、献上品や食事の準備が進められます。そして行幸当日、前田家所蔵の文書や蔵器の陳列の場として用いられた部屋が、雅邦の襖絵のあるこの二室でした。

大正期末、時勢への配慮と東京大学からの要請により、本郷邸の解放が決まります。行幸の記念である西洋館も、日常生活を営んだ日本館も譲渡されることになりました。しかし、雅邦の襖絵はそれを逃れ、新しく本邸となった駒場邸でも用いられ続けたのです。

（村上尚子　学芸員）

周知のように、「古九谷」は、明暦元年頃から宝永七年頃（一六五五頃～一七一〇頃）加賀温泉郷で有名な山中温泉から大聖寺川を十三キロあまり上流にさかのぼった九谷の地で焼成された色絵磁器をいいます。古窯の発掘調査は、昭和四十五年より五次にわたって行われ、昭和五十四年には国の史跡に指定されています。古九谷窯廃絶後は、加賀地方では製陶が行われず、窯業再興の先鞭をつけた一つが、文化四年開窯した金沢の**春日山窯**です。京都から青木木米が指導に訪れ、木米好みの中国趣味を反映した焼き物が焼かれました。この窯は文政初年頃に廃窯になりますが、それを惜しんで操業されたのが加賀藩士武田秀平（号民山）によって、文政五年に開かれた赤絵細描を特色とする**民山窯**です。いずれも金沢地区での開窯です。

もう一つ、能美・小松地区で先鞭をつけたのが文政二年頃開窯の**若杉窯**です。藩の保護奨励もあって興隆し、いわゆる殖産興業の量産方式による日用雑器が中心に焼かれます。また文政二年には本多貞吉に陶法を学んだ藪六右衛門開窯の**小野窯**、弘化四年小松の松屋菊三郎が主宰した**蓮代寺窯**、幕末から明治初年にかけて、華麗な彩色金襴手の技法で一世を風靡した九谷庄三などが活躍しています。

他方、江沼地区で雄勁な筆致、渋くて深く、しかも厚く彩られた豪放華麗な古九谷の再興をめざして、文政七年に開窯したのが**吉田屋窯**です。このほか、赤絵細描を特色とする、天保三年開窯の**宮本屋窯**、吉田屋窯の塗埋様式を踏襲する**松山窯**、金襴手で有名な永楽和全など今日の江沼九谷の流れが形成されます。

以上、今日の九谷焼の源流となっている、これらの諸窯の特色と変遷をご鑑賞下さい。

（末吉守人　普及課長）

県指定文化財　色絵鶴かるた文平鉢
古九谷

常設展示室（第2展示室）
特　集
古九谷・再興九谷名品展
前期　6月28日（木）～7月24日（火）

常設展示室(第4展示室)
特　集
坂寛二・坂坦道
油絵と彫刻
6月28日(木)～7月24日(火)

寛二と幼少の坦道

能登内浦の恋路海岸は、見附島を眼前にする景勝地ですが、その一角に「悲恋物語」の像が建てられ、観光客には格好のシャッターポイントとなっています。この像の作者が坂坦道で、生家はこのすぐ近くでした。坂家は三代にわたって美術家を輩出し、坦道の祖父は日本画家坂藹舟（あいしゅう）、父は洋画家で坂寛二、そして彫刻家坦道と、これはなかなかない一族ではないでしょうか。今回の特集は三人の中から寛二・坦道、この父と子の作品をご覧いただきます。

坂寛二は明治二十四年内浦町恋路に藹舟の次男として生まれました。父は南画家谷口藹山に師事した画家で、能登を中心に多数の作品が知られています。寛二は十五、六歳の頃に上京し、黒田清輝に師事したといわれています。その後、奈良、大阪、金沢と移り、二科会に出品。本県の金城画壇展では第三回展に出品、また陶芸家との二人展や、グループ展を開いた記録が残っています。しかし、将来を嘱望された存在であったのですが、惜しくも昭和三年に三十六歳で早世してしまいました。

写真は寛二と小学校に入学した坦道が昭和二年に恋路のアトリエ内で写されたものです。バックに写る大作の「尾小屋鉱山」は今回展示いたします。

坂坦道は、本名を青嵐といい、大正九年内浦町に生まれました。父寛二が没したのち北海道に転居し、その後、東京美術学校（現在の東京芸術大学）に入学しています。昭和十九年には東京美術学校彫刻科を卒業しますが、在学中の十八年第六回新文展に初入選を果たしました。戦後は日展に出品し、入選を続けたのち、三十九年開催の第七回日展（新日展）に「青年像」（本展に出品）で特選を受賞しています。また五十七年には日彫展で「酔っぱらい」（本展出品）が西望賞を受賞し、同年、札幌市民芸術賞も受賞しています。

こうした作家活動の一方で、北海道女子短期大学で長らく教鞭をとり、文部大臣より短期大学教育功労賞を受けたほか、平成七年には同短大の名誉教授に就任しています。

草花図　坂寛二

道化師などの特徴的なものを得意としますが、初期には世相を色濃く反映した人物像も制作しています。北海道へ渡ったのちも、郷里石川への想いは断ち難く、「御陣乗太鼓」「帰り舟」（いずれも本展出品）など、故郷を彷彿とさせる作品も作りましたが、その思いを残しながら平成十年、七十七歳で亡くなりました。

今回、ご遺族より寛二の油絵と坦道の第七回日展特選受賞作などの寄贈を受けたことから、それらをここに公開するものです。

酔っぱらい　坂坦道

常設展示室
主な展示作品
6月28日(木)～7月24日(火)

◉＝国宝　◎＝重要文化財　○＝重要美術品
□＝石川県指定文化財

色絵万年青図平鉢　吉田屋窯

風景の中の竪琴　吉田　隆

前田育徳会展示室
特集　橋本雅邦筆「四季山水図襖」
※2ページをご覧下さい。

第1展示室
◉色絵雉香炉　野々村仁清（にんせい）
◎色絵雌雉香炉　野々村仁清

第2展示室（古美術）
特集　古九谷・再興九谷名品展

古九谷
□色絵鶴かるた文平鉢
○□色絵布袋図平鉢
□色絵鳳凰図平鉢
□青手樹木図平鉢

再興九谷
色絵万年青（おもと）図平鉢　吉田屋窯
赤絵弾琴図鉢　宮本屋窯
色絵芦翡翠（かわせみ）図平鉢　松山窯
色絵唐獅子牡丹図平鉢　若杉窯
色絵楼閣山水図蓋物　小野窯
色絵石畳文古九谷写平鉢　蓮代寺窯

第3・4展示室（油彩画・彫塑・造形）

油彩画
アンティックの部屋　円地信二
ETUDE(A)　鴨居　玲
戸隠山　清水錬徳
カサブランカ　高光一也
亡き息子を忍ぶ母親の像　竹沢　基
装置　開　光市
熱叢夢　宮本三郎
仮面の告白　吉田冨士夫

彫塑・造形
海　石田康夫
夏　得能節朗
風景の中の竪琴　吉田　隆

特集　坂寛二・坂坦道　油絵と彫刻
※3ページをご覧下さい。

第5展示室（工芸）

陶芸
青手小禽文飾皿　北出不二雄
釉裏金彩牡丹唐草文鉢　吉田美統

漆工
乾漆稜線文器　塩多慶四郎
曙小屏風　寺井直次

染色
麻地友禅瓜模様振袖　木村雨山
せせらぎ　堀　友三郎

金工
砂張（さはり）銅鑼　金岡宗幸
神韻大香炉　高橋介州

木竹工
欅造盛器　川北良造
桑造金銀縮れ線象嵌飾棚　氷見晃堂

第6展示室（日本画）
山里　石川　義
酔燕台翁　伊東深水
夏日　稲元　実
海の伝説　梅川三省
鯰談義図　大沼憲昭
大楠公・義貞公誠忠之図　久保田米僊
火焔山　西山英雄
岬　由里本　出

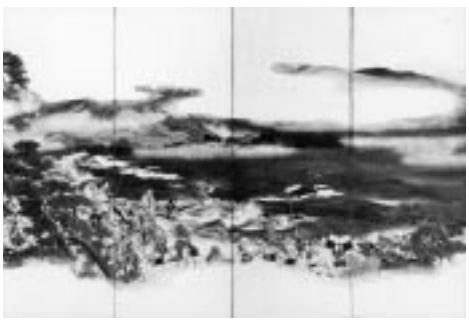
※このページでは各室展示作品の主なものを掲載しています。（第1展示室は色絵雉香炉二点のみ）。

◆**観覧料**

個人	一般	350円
	大学生	280円
	高校生以下は	無料
団体（20名以上）	一般	280円
	大学生	220円
	高校生以下は	無料

仮面の告白　吉田冨士夫

釉裏金彩牡丹唐草文鉢　吉田美統


大楠公・義貞公誠忠之図（左隻部分）　久保田米僊

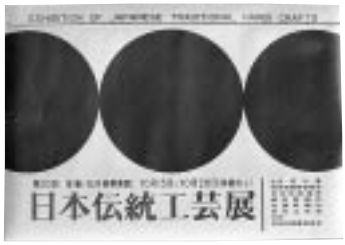
美術館小史・余話 12

嶋崎　丞（すすむ）　当館館長

日本伝統工芸展金沢展開催の経緯（いきさつ）

昭和三十四年の秋に開館した旧石川県美術館は、県庁より引き継いだ旧商品陳列所の美術品を常設展示とし、それに石川の伝統工芸のなかでも主として江戸時代の古美術品を中心に、企画テーマを設定しながら運営を行ってきた。先月号ですでに述べたように、その最も大規模な企画展が、加賀百万石名宝展であった。

ところが開館以来くすぶっていた展示室の外部団体への提供、いわゆる貸展示室の問題が急浮上してきた。すでに旧館の開館二年目の昭和三十五年に金沢市内で第二回の日展が開催された時、第四科の工芸部門を当館で対応したことも手伝って、そのことが話題となった。美術館は、本来貸展示室を行う機関ではなく、美術館のスタッフが企画運営を行うべきで、日展の場合は例外中の例外であるとし、大いに議論がたたかわされた。そこへ日本伝統工芸展の巡回展を引き受けてくれないかという話が、松田権六さんから舞い込んできた。日本伝統工芸展は、いわゆる人間国宝を中心に文化庁や県教育委員会が関係する展覧会であり、工芸を運営の柱に据えている美術館にとっては受けるべきであるという意見と、これを受けたら各種団体の申し込みを断ることができなくなるという意見とで侃侃諤諤（かんかんがくがく）であったが、結局受けることになった。それ以来今日まで、日本伝統工芸展は当館の秋を飾る代表的な展観となって続いている。



金沢で初めて開催された日本伝統工芸展のポスター（第10回・昭和38年）

展覧会回顧

彫刻家　吉田三郎展

金沢が生んだ彫刻家・吉田三郎の回顧展として開催したものでした。本館企画では初めてとなる彫刻展とあって、多くの彫刻ファンが来場し、吉田の得意とする人物像の数々に、大いに満足していただけたようでした。

活動の場が東京であったこと、昭和三十七年に没してはや四十年の月日を数えることから、吉田の名が今ひとつ知られていなかったため、今回の展示では、その吉田を慕って上京し、東京美術学校に学んだ都賀田勇馬、松田尚之などの郷土出身作家をはじめ、吉田のもとで研鑽を積んだ木村珪二・堀義雄・伊藤五百亀・中村晋也などの作品もあわせて取り上げました。その結果、地元からはもちろん、遠く東京や九州から、吉田の孫弟子にあたる人たちなどの来場者を迎え、東京教育大をはじめとする教育界や白日会の彫刻部の活動において吉田が果たしてきた役割の大きさを、あらためて感じることになりました。

また、彫刻作品ばかりでなく、いろいろな人との交流にもスポットをあててみました。

東京美術学校時代の同期であった北村西望との長い交友関係は、今回の展示で示した多くの書簡のやりとりや、北村の文化勲章受章の際の代表世話人としての吉田の活躍ぶりから、極めて緊密な関係であったこともうかがい知ることができました。逆に北村からは、吉田を取り上げた雑誌『造形』で吉田の人となりを紹介する文章が寄せられ、そのなかで北村は、五十年来の親友であり、何でも知っていると述べています。

東京・田端における多くの人との交遊も、この展覧会を通じて、あらためて思い知らされるものでした。板谷波山・室生犀星など本県ゆかりの人たちも多く含まれ、田端文士村と称された当時を思い起こさせるとともに、吉田の面倒見のよい人づきあいが明らかとなりました。

また吉田の芸術院会員就任記念の芳名録には、発起人の代表を朝倉文夫が務めていたことが記されています。朝倉塾時代の交流にとどまらず、長く続いた関係を示しているといえましょう。今回展示した朝倉文夫作「墓守」は展覧会直前に原型が重要文化財の指定を受けました。その意味でも注目を集めた作品の一つとなりました。

この朝倉塾への関わりについては、朝倉彫塑館学芸員村山万介氏が本展図録に示されたように、石川県立工業学校時代の師・青木外吉と朝倉文夫の兄・渡辺長男との交遊に基づくものと推測されます。その関係もあって、吉田に続く、県立工業学校から東京美術学校へ進んだ彫刻家の多くが、朝倉塾で活躍しており、当時にあっては石川出身者と朝倉塾との深いつながりがあったことを見出すことができました。

県立工業学校での師・青木外吉は、石川県より文展に初めて入選したことでも知られています。東京美術学校におけるその卒業制作が現在も残されており、今回展示することができましたが、明治の段階でその原型が焼失していたこともあり、初めての公開となりました。

吉田本人の作品だけでなく、こうした周辺の作家の作品を見るにつけ、今日、多くの作家を擁する本県の彫刻界にあって、その先駆けとして吉田三郎の果たした役割の大きさを、あらためて感じさせる展覧会であったように思います。

（谷口　出　学芸専門員）

企画展示室

第87回　光風会展　金沢展

七月六日(金)～十日(火)
(第7・8・9展示室)

光風会は、大正元年の創立で、数多い美術界にあって最も古く、豊かな歴史と伝統を持つ美術団体です。そのモットーは具象を基本にしながらも常に新しいレアリズムの追求に情熱を燃やし続けることです。今回の金沢展は今春東京都美術館で開催された中から基本作品百五点と本県在住作家の作品四十四点、計百四十九点を展示いたします。

主な出品者
中央作家
寺島龍一（芸術院会員）庄司栄吉（芸術院会員）
堀友三郎（理事　工芸）
地元作家
円地信二　松本昇　谷昭二　三浦泉

入場料　一　般七〇〇円（五〇〇円）
大高生四〇〇円（三〇〇円）中小生無料
（　）内は団体料金
※当館友の会会員は会員証提示により団体料金

〈連絡先〉金沢市窪一―三一
光風会石川連絡所　細川紘關
☎〇七六―二四一―一三七〇

第29回日本の書展

七月十三日(金)～十七日(火)
(第7・8・9展示室)

日本芸術院会員の村上三島氏、杉岡華邨氏、小林斗盦(あん)氏など、現代書壇代表約八十人の作品を一堂に展示し、あわせて石川県書美術振興会会員約二百人も含め、およそ二百八十点の作品を展示します。

入場料　一般五〇〇円　高大生三〇〇円　小中生一〇〇円
※当館友の会会員は、会員証提示により一般四〇〇円。

〈連絡先〉金沢市香林坊二―五―一　北國新聞社事業局
☎〇七六―二六〇―三五八一

第15回日本新工芸石川会展

七月二十日(金・祝)～二十四日(火)
(第7展示室)

日本新工芸家連盟は、工芸の原点を見つめ、個々の作家が素材を充分に生かし技術を駆使して、現代に望まれている生活と美との調和をテーマとして制作活動を続けています。石川会展も十五回を迎えることが出来ました。会員一同、一層の努力を重ねております。より多くの方々にご高覧、ご批判を戴きたいと念願しております。

主な出品作家
北出不二雄・高光一生・利岡光仙・榎木荘平
組橋貞風・中町朱実・原田実・戸出克彦・松本昭二
向瀬孝之・柴田博・川田稔・比古田三恵・大井幸子
北浜芳恵・伊豆蔵幸治・高聡文・畑宏・中尾喜久二
金田一司・滝川千春・高光一雅

入場料　一般六〇〇円　大学生以下三〇〇円
※当館友の会会員は、会員証提示により三〇〇円

〈連絡先〉金沢市宮野町ト七四　戸出克彦
☎〇七六―二五七―五九五一

第43回北陸創造展

七月二十日(金・祝)～二十四日(火)
(第8・9展示室)

北陸創造美術会は、各作家がその主体性に基づくオリジナルな芸術を創造するために、最も自由で活動的な研鑽の場を作ることを目的としています。六月上旬、東京都美術館で行われた創造展に入選した作品を中心に、北陸支部会員百余名が、五部門（洋画・日本画・染織画・彫刻・陶芸）にわたって展示します。

入場無料

〈連絡先〉小松市遊泉寺町ホ一二〇　辻　実
☎〇七六一―四七―一〇一八

生誕二四〇年　北斎展

七月二十八日(土)～八月十九日(日)
(第7・8・9展示室)

幕末に、江戸で活躍した浮世絵師・葛飾北斎は、存命時から西欧に紹介され、印象派の画家など、多くの芸術家に多大な影響を与えた画人として知られます。本展は、九十歳で亡くなった北斎の肉筆画、画稿、錦絵、摺物、絵暦、版本などの代表作約二百点を幅広く展観し、そのすぐれた画業を概観しようとするものです。

入場料
一般一、二〇〇円　高大生八〇〇円
小・中生六〇〇円　団体料金は各二〇〇円引
※当館友の会会員は、会員証提示により団体料金扱い。

〈連絡先〉金沢市香林坊二―七―一五
北陸中日新聞事業部
☎〇七六―二三三―四六四二

貸出中の所蔵品

裸婦像　宮本三郎筆
阿修羅　宮本三郎筆
計二点

展覧会　和と洋　―ふたつの文化の間で―
会　期　七月十七日(火)～九月十六日(日)
会　場　小松市立宮本三郎美術館

企画展TOPIC

高島北海

高島北海像浮彫　エルネスト・ビュシエール
1887年　ナンシー派美術館蔵（右）
山水図　高島北海　ナンシー派美術館蔵（左）

九月の企画展では、ナンシー（フランス）に花開いた総合芸術の全容が公開されますが、その中に一人の日本人の作品が数点出品されます。「日本人がなぜここに？」と思われるかもしれません。その人の名は**高島北海**（本名得三、一八五〇～一九三一）。ナンシー滞在わずか三年にして、かのアール・ヌーヴォー運動に大きな影響を与えたといわれる日本画家です。

現在の山口県、萩藩医の家の次男として生まれた高島は、農商務省山林局林務官となり、一八八五年春、ナンシー森林高等学校に留学します。そして欧州各地の森林を視察するのですが、彼には日本画の心得があり、視察の合間に山岳などのスケッチも欠かすことなく続けました。これらは後に欧州の山岳を取り入れた、高島独自の山水画に生かされていきます。また彼は当地の文化人、美術家たちとの交流も深めます。その中には、後のナンシー派**エミール・ガレ**（前号で紹介）や**ヴィクトール・プルーヴェ**（一八五八～一九四三）らもいました。

この頃のフランスでは、日本美術への関心が高く、美術品の収集はもとより、日本や日本美術に関する数多くの本が出されていた時代です。そんな時にちょうど日本画をよくする人物が現れた、これは注目を浴びたことでしょう。特に高島とガレとは同じ植物学や鉱山学を学び、自然に対する関心も人一倍強い者同士。やはりウマが合ったのでしょうか、親密な交際が続けられたようです。留学二年目の一八八六年には、当地芸術団体主催の展覧会へ出品、高い評価を得ます。その後も日本美術の紹介に努めますが、一八八七年フランス政府からその功績が認められ、教育功労勲章を受けました。

一八八八年春、市民に惜しまれながら高島は帰国。もう再び訪れることはありませんでした。ガレを中心とするメンバーが、同市でエコール・ド・ナンシー芸術産業地方同盟を設立、いわゆるナンシー派を旗揚げしたのは、高島が当地を去ってから十三年後、一九〇一年のことです。

その後の高島は林野行政に携わるかたわら、画業にも励みます。官職を退いた後、文展（文部省美術展覧会）審査員を務める有力な画家になりますが、世間に知られるようになるのは、一九六〇年代後半のこと。没後四十年近くたってから、アール・ヌーヴォー運動の展開に関係した人物として、再評価されるようになったのです。

明治の昔、人知れず遠く異郷の地で活躍した若き日の高島北海。彼が残した作品はナンシーの人々によって大切に保管され、今百年以上の時空を越えて私たちとの出会いを待ちます。きっとこの展覧会の見所の一つとなることでしょう。

（前田武輝　学芸主査）

第18回全国都市緑化いしかわフェア協賛**「花と装飾　ナンシー派展」**
九月一日（土）～二十四日（月・振休）

次回の展覧会

特　集　加賀藩の美術工芸（前田育徳会展示室）
特　集　古九谷・再興九谷名品展（第2展示室）
特　集　石川の人形（第5展示室）
七月二十七日（金）～八月二十八日（火）

七月の行事案内

《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》

月日	行事	内容	会場
7／1（日）	月例映画会	日本の美　金閣銀閣（30分） 古九谷　豪放華麗な色絵（23分）	ホール
7／7（土）	土曜講座	漆芸の魅力　4　田口善国・北村昭斎（寺尾健一　学芸専門員）	講義室
7／8（日）	CDコンサート	バッハのカンタータ（約45分）	ホール
7／14（土）	土曜講座	伊勢物語の意匠（前田武輝　学芸主査）	講義室
7／15（日）	月例映画会	日本の美　桂離宮（30分） 日本の書（20分）	ホール
7／21（土）	土曜講座	坂寛二　石川洋画の先駆者（二木伸一郎　学芸主査）	講義室
7／22（日）	月例映画会	中国の陶磁　唐・宋・元・明の名品（23分） 韓国の陶磁　高麗・李朝の名品（23分）	ホール
7／28（土）	土曜講座	漆芸の魅力　5　高野松山・山崎覚太郎・佐治賢使（寺尾健一　学芸専門員）	講義室
7／29（日）	CDコンサート	バッハのカンタータ（約45分）	ホール

※全館休館日は七月二十五日（水）・二十六日（木）です。

各地の展覧会　七月

※開催日程、休館日、内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。

菅原道真没後1100年　天神様の美術　7／10～8／26
東京国立博物館（東京都台東区・〇三―三八二一―一一一一）

イタリア陶磁器の伝統と革新　ジノリ展　8／19まで
東京都庭園美術館（東京都港区・〇三―三四三一―〇二〇一）

福田繁雄展・福田美蘭展　7／14～9／9
世田谷美術館（東京都世田谷区・〇三―三四一五―六〇一一）

～生きる喜び～　エミルタージュ美術館名品展　7／6～9／5
新潟県立近代美術館（長岡市・〇二五八―二八―四一一一）

ロダンと日本展　8／19まで
愛知県美術館（名古屋市東区・〇五二―九七一―五五一一）

ミニマル　マキシマル　―ミニマル・アートとその展開―　8／12まで
京都国立近代美術館（京都市左京区・〇七五―七六一―四一一一）

仏舎利と宝珠　―釈迦を慕う心―　7／14～9／2
奈良国立博物館（奈良市・〇七四二―二二―七七七一）

白髪一雄展　7／22まで
兵庫県立近代美術館（神戸市灘区・〇七八―八〇一―一五九一）

色絵芦翡翠図平鉢

松山窯

江戸　19世紀

口径40.5　底径18.7　高7.0（cm）

見込みの円窓内に、芦に止まる翡翠と流水が絵画的に描かれています。獲物を狙い定め、今まさに飛びかからんとするその一瞬を巧みに捉えて描写していますが、翡翠の眼光鋭いその表情は、作品に見事な緊張感を表出しています。周囲の縁文様は、十二区画に分割し、その中に花文と雲文を交互に配しています。

見込みの余白を生かした絵画的表現に対して、デザイン化された縁文様は、一幅の絵画における画面と表具のような効果的な趣を呈しているようです。素地は鼠色を呈し、所々に御本（淡紅色の斑文）が現れ、絵の具は紫、緑、紺青、黄の四彩を用いています。

裏面は、周囲に蔓唐草をめぐらして緑彩を、高台内には木の葉文を散らして黄彩をそれぞれ施し、中央に二重角「福」の銘を緑彩しています。

松山窯とは、嘉永元年（一八四八）に、大聖寺藩の藩窯として、江沼郡松山村（現加賀市松山町）の山本彦左衛門に命じて松山に窯を築かせたものです。粟生屋源右衛門、松屋菊三郎を招き、九谷村の旧地と吸坂村などから陶石や土を取り寄せ、主として藩用の陶磁器を焼かせたのが始まりで、松山御上窯と呼ばれました。文久の末頃に民営に移り、明治五年（一八七二）頃まで続いていたようです。作品の多くは塗埋手の青手古九谷の様式のものですが、色絵や染付のものも焼成されました。

（高嶋清栄　学芸専門員）

※第2展示室で展示中。

ミュージアムショップ通信

入梅――　じめじめと、鬱陶しい日が続きます。

さてショップ正面のショーケース、そこに赤と緑の丸い香合があるのを見たことありますか？。そう、雉香炉ミニチュアのすぐ横、交趾金花鳥香合（左写真下）です。商品の方は九谷焼ですが、モデルとなった当館所蔵品（左写真上）の方は交趾焼と呼ばれるものです。お茶に詳しい人以外はちょっとピンとこないかもしれません。「交趾」というのは、遙か昔の中国は漢の時代からある郡名で、今のベトナムあたりを指します。「あ、それじゃベトナムの焼き物…？」えー、いやどうもそうじゃないみたいで、実は中国南部の広東省から浙江省あたりの窯で焼かれ、それが交趾通いの船で日本に持ち込まれたというのが名前の由来らしいです。交趾焼は素地に直接色釉（緑、黄、紫）をかけて焼く技法の、いわゆる三彩の一種。その釉法は、京焼にも大きな影響を与えたといわれています。桃山から江戸初期にかけてたくさん輸入されて、当時の茶人たちにとても珍重されました。特にこの金花鳥香合は数も少なく、貴重品だったようですね。商品の方は交趾焼というわけにはいきませんが、本物の持つ肌合いをほどよく再現しています。

交趾金花鳥香合
明　17世紀

交趾金花鳥香合（九谷焼）
（定価15,000円）

休館日

七月二十五日（水）・二十六日（木）

石川県立美術館だより
第二一三号　平成十三年七月一日発行
〒九二〇―〇九六三　金沢市出羽町二番一号
TEL　〇七六（二三一）七五八〇
FAX　〇七六（二二四）九五五〇